

ロシアの「タンゴ狂」

耽娛亭 充義

作曲家ソフィア・グバイドゥーリナがタンゴに興味を持ち、彼女と親しいロシアの前衛クラシック音楽のソリストたち——バヤーンのフリードリヒ・リップスや、その息子スヴィャトスラフ・リップスなど——が中心になって、ピアソラのタンゴを演奏し始め、そこに世界的なヴァイオリニストであるギドン・クレメルが加わっていく……。何やら不思議な、途方もない「タンゴ・コネクション」が現代のロシアにはあるらしい。それにしても、ロシアとタンゴという組み合わせは、意外だ——こんな風に受け取る向きも多いことだろう。確かに、情熱的な南米が生んだ音楽と、雪にとざされた北国ロシアとでは、相性があまりよくなさそうに見える。

ところが、20世紀のロシア・ソ連の音楽の流れを振り返ると、これは意外でもなんでもない。リップスたちが演奏する多分にクラシカルに洗練されたピアソラのようなタイプの音楽は別として、もっと大衆的なポピュラー音楽の分野では、タンゴはロシアではもともと非常に人気が高かった。いや、戦前のソ連や、国外の亡命ロシア人の間で、タンゴと言えば、ポピュラー歌謡の「王道」だったと言ってもいいくらい、有力な音楽ジャンルになっていたのである。

1913年の春、パリに端を発した「タンゴ狂」(Tangomania)は、すぐにヨーロッパ中を席卷するが、ロシアもその例外ではなかった。同年の秋にはモスクワやペテルブルグのレコード店はタンゴの曲を豊富にとりそろえ、やがてミュージック・ホールや舞踏場はタンゴに熱狂する流行好きのロシア人たちであふれるようになったという。例えば、『モスクワの声』という雑誌の1913年12月号の広告を見ると、「蓄音機協会」のモスクワ店では、「ジョアキノ」「ミツ」「エル・ホエロ」「愛のタンゴ」「アマパ」といったタンゴのレコードが、「キューバン・タンゴ」「メキシカン・タンゴ」「アルゼンチン・タンゴ」などと銘打たれて売られていたことがわかる。ディアギレフのロシア・バレエ団に関わった画家として有名なレオン・バクストは早速「タンゴ・スカート」をデザインしたし、ロシアの女性前衛美術家ナタリヤ・ゴンチャローヴァも有名なタンゴ・ダンサーであるエルザ・クリューゲルのために特別なドレスを作っている。

1913年の秋に始まったロシアのタンゴ熱に油を注いだのは、フランスの俳優マックス・

ランデルがロシアを訪れて、ペテルブルグやモスクワで公演を行なったことだった（1913年11月～12月）。ランデルはサイレント映画時代を代表する世界的な俳優で、喜劇を専門としたが、黒いタキシードとシルクハットを身につけたダンディな紳士の姿でいつも登場し、当時ロシアでも映画ファンの間ではすでに「カルト的」ともいべき人気を誇っていた。その彼がロシアで、「愛とタンゴ」という洒落た寸劇を披露したからたまらない。大人気となったタンゴは、モスクワやペテルブルグのあちこちの小ステージや舞踏室に破竹の勢いで進撃していったのだった。実際、ロシアではタンゴは踊りと歌にとどまらず、舞台芸術の分野にも強いインパクトを与え、タンゴ的な身振りを積極的に取り込んだ俳優がキャバレー・タイプのヴァラエティ・ショーから演劇、そして初期映画で活躍することになった。

タンゴがこれほど流行った以上は、「どうしてタンゴはこれほど魅力があるのか？」という疑問をめぐる議論が当時のロシアで盛んに行なわれるようになったとしても、不思議はないだろう。俳優であり、有名な批評家でもあったミハイル・ボンチ＝トマシェフスキーなどは、『タンゴの本——芸術とセクシュアリティ』（モスクワ、1914年）という単行本を出版して、当時世界的に話題になっていた「裸足のダンサー」イサドラ・ダンカンの奔放な踊りと比較しながら、フロイトさえ援用して、タンゴの20世紀的な魅力はむしろ抑制されたセクシュアリティにあって、「タンゴのエクスタシーは、氷の下の炎なのだ」と論じている。

それに対して、ベルグソンの影響を多分に感じさせる語彙を使ってすぐさま反論を加えたのが、ペテルブルグのアレクサンドル・クーゲリだった。クーゲリによれば「確かにタンゴは性的であり、だからこそゆったりと続く。なぜならばエロティシズムの強烈さは持続に依存するからである」。そして、タンゴにまとりわりつく秘密めいた雰囲気こそ、「タンゴの悲劇的なセクシュアリティ」を生み出しているものであって、ボンチ＝トマシェフスキーはこのタンゴの悲劇性に気づいていない……。

タンゴの「セクシュアリティ」をめぐる、20世紀初頭のロシアで、これほど熱い思想的な議論が戦わされていたとは、驚くばかりである。それだけではない。「タンゴ狂」はさらに、当時前衛芸術の最前線を切り拓きつつあった未来派の人たちをも巻き込んだ。「未来派とタンゴ」はおそらく新たに大論文が書けるほどのテーマだが、ここでは『未来派キャバレー第13番におけるドラマ』という映画のことにだけ、ちょっと触れておこう。ダヴィド・ブルリューク、ナタリヤ・ゴンチャローヴァ、ヴァシーリイ・カメンスキー、ミハイル・ラリオノフ、ヴラジーミル・マヤコフスキー、ヴァジム・シェルシェネヴィチといった錚々たる前衛芸術家たちの参加を得て1913年末に製作され、翌年1月に公開された20分ほどのこの映画は残念ながらフィルムが現存していないが、その中には「未来主義タンゴ」および「死の未来ダンス」というシーンがあり、そのどちらも、タンゴを

未来派流に換骨奪胎したものだったのである。

その後の 20 世紀ロシアのポピュラー歌謡のなかで、タンゴの占める位置は非常に大きい。ロシア革命後亡命して、世界を転々とした不世出のキャバレー歌手アレクサンドル・ヴェルチンスキーの最も有名な歌の一つは、むせかえるような南国の異国情緒を背景に終わってしまった恋をやるせなく歌った「タンゴ・マグノリア」という曲である。

バナナとレモンのシンガポールで 嵐のなか
大洋が歌声と泣き声をあげるとき
目くるめく瑠璃色の空を
遠く鳥の群れが疾駆する

バナナとレモンのシンガポールで 嵐のなか
心が静かなとき
あなたは暗い青色の眉をひそめ
ひとり憂いに身をゆだねる
そしてあの五月の空や
ぼくの言葉や愛撫や ぼくのことを
やさしく思い出し
イヴェッタ、あなたは泣く

わたしたちの愛はもう終わりね
心は愛の火もなく冷えてしまったわ、と
オウムの叫びにうっとりとなり
花咲く野性のマグノリアのように

あなたは泣く、イヴェッタ
歌はまだおしまいじゃない
この夏はどこかで
夢のなかに逃げてしまったわ、と

オパールと月のシンガポールで 嵐のなか
風にバナナの木がたわむとき
黄色い毛皮の上であなたは一晩中
猿の悲しい鳴き声を聞きながら夢を見る

バナナとレモンのシンガポールで 嵐のなか
指輪と腕輪の音も軽やかに
あなたはぼくを愛する
熱帯の瑠璃色のマグノリア！

この名曲中の名曲は、スペイン語バージョンを野谷文昭さんの甘い声でぜひ歌っていた
だきたいものだ。耽楽亭、そのときは拙いながらもぜひピアノ伴奏をしよう。

ヴェルチンスキーと並んで亡命ロシアの「エストラーダ」(軽音楽)の雄となったのは、
戦前ルーマニアを本拠地として活動をしたオデッサ近郊出身の歌手ピョートル・レシチェ
ンコだったが、彼の持ち歌の多くも、明らかにタンゴのリズムを使ったものである。レシ
チェンコはブカレストに自分の名前を冠した「レシチェンコ」という洒落たレストランを
開き、そこが「亡命ロシア音楽」の一つの拠点となったが、ソ連軍がブカレストに進攻し
た際にこのレストランは閉鎖された。レシチェンコは戦後も社会主義化したルーマニアに
残って歌手活動を続けたが、1951年に秘密警察に逮捕され、54年に収容所で病死したと
伝えられている。しかし死に至る詳細はいまだに明らかになっていない。一方、『私の最
後のタンゴ』を始めとする、タンゴの名曲をレシチェンコに提供したストロークは、「ロ
シア・タンゴの王様」の異名をとる作曲家で、ラトヴィアのリガに住んでいた。

このように「退廃的」なタンゴはどうやらロシア革命後のソ連よりも、亡命ロシア世界
の気分にあったものと見える。ロシア未来派から亡命ロシアへ。タンゴは世界に散り散り
になりながらも、受け継がれていった。ここでロシア革命後の亡命者たちの気分を濃厚に
反映したタンゴの名曲として忘れてはならないのは、伝説的なロシア系ロマ(ツイガン)
のジプシー・ロマンスの名手、アリョーシャ・ディミトリエヴィッチ(1913年、おそら
くロシア生まれ、1986年にパリで没)の持ち歌として知られる「亡命のタンゴ」である。

君たちはどこに行ってしまったんだ、ガリツィアか、アテネか？
いまどこにいるんだ、パリか、バクーか？
ひょっとしたらアルゼンチンの平原か？
ヨーロッパへ穀物を運んでいくところか？

(中略)

おれの兄貴はイルクーツクで病院の守衛
親父はグリーンランドで漁協の漁師
妹はニースで新聞売りを一年以上もやっている
叔父貴はハンガリーだが、だからどうってこともない。

もう心はへとへと、ぼろぼろだ
魂はロシアへの道を探し求めている……

このようにロシア革命後から第二次世界大戦に至る時期にロシア・タンゴの名曲は数多いのだが、もう一つ、極めつきの名曲をここで挙げなければならない。それはニキータ・ミハルコフ監督がスターリン時代を扱った大作映画『太陽に灼かれて』の主題歌として使った「疲れた太陽」という曲である。これは映画で描かれているまさにその時代、1930年代に流行った曲で、ツファスマンのジャズ・オーケストラが演奏し、ミハイロフが歌う当時の録音が、ソ連の「なつメロ」を集めたCDの中にも再録されている。ヨシフ・アリヴェクによるロシア語の歌詞はこんな内容である。

疲れた太陽が
優しく海に
別れを告げ
そのとき君は
告白した
愛はないと

僕は急に
ちょっとさびしくなった
憂いも悲しみもなく
そのとき響いた
君の言葉

もう別れよう、恨んだりはしない
君も僕も悪いのだから

疲れた太陽が
優しく海に
別れを告げ
そのとき君は
告白した
愛はないと

この曲は、最近ギドン・クレメルアルバム『ピアソラへのオマージュ』(Nonesuch WPCS-5070)にも、「エル・ソル・スエニョ(ピアソラへのオマージュ) El sol sueño: Hommage á Astor Piazzolla」として収録された。ただし、タイトルが「夢の太陽」を意味するスペイン語に変えられてしまっているので、タイトルからはまさか同じ曲とは推測できないだろう。CD日本版の解説でもこの曲の由来が説明されていないので、一言ここに付け加えさせていただきます。

ところでこの「疲れた太陽」の作曲者の名字はロシア語ではペテルブルクスキー **Петербургский** と表記されているが、じつは彼はロシア人ではなく、ワルシャワ生まれのユダヤ系ポーランド人で、ポーランド語表記ではその名はイェジ・ペテルスブルスキ (Jerzy Petersburski, 1895-1979) となる。母方はクレズマー(東欧ユダヤ人の民族的音楽)の作曲家の家柄だった。ペテルスブルスキはワルシャワ音楽院に学び、1922年にはジャズ・オーケストラを結成、ポーランドで音楽活動を開始した。その彼が1935年に作ったのが「最後の日曜日」(To ostatnia niedziela)というタンゴで(作詞ゼノン・フリードヴァルト)、戦間期ポーランド最大のヒット曲の一つとなった。往年の名歌手ミェチスワフ・フオグの歌ったものが特によく知られている。その歌詞は、心変わりをした恋人に最後に一回だけ、日曜日に会って欲しいと懇願する若者の暗い心情を描き、若者が自殺の決意を仄めかしているように取れることから、「自殺のタンゴ」と呼ばれることもあった(そのため、ほぼ同時期、1933年にハンガリーで発表され、これもまた大ヒットとなったシェレッシュ・レジェー作曲による「暗い日曜日」と混同されることもあるが、これはまったく別の歌である。「暗い日曜日」のほうは実際に多くの自殺を誘発したことで知られる)。そして、この「最後の日曜日」はソ連でも人気を博し、「疲れた太陽」というロシア語版が作られて演奏されることになった。つまりミハルコフの映画の主題歌は、「疲れた太陽」と題されてはいるが、そのメロディはポーランドのペテルスブルスキが作曲した「最後の日曜日」そのままなのである。

当の作曲家のその後の運命はというと、1939年にポーランドがナチス・ドイツとソ連に分割されたとき、彼はソ連領となったビャウストクにいたため、そこでベラルーシ共和国ジャズ・オーケストラを結成することになった。第二次世界大戦後は南米に亡命し、1947年から1967年までアルゼンチン、ブラジル、ベネズエラなどで音楽活動を続けた。ブエノス・アイレスの国立劇場 **Teatro El Nacional** では楽団長を務めている。この当時彼は **George Petersburski** と名乗っていたという。しかし1967年にはポーランドに帰国、1979年にワルシャワで亡くなった。耽娯亭もいつか大学を辞めたら、このペテルスブルスキの生涯の軌跡をたどって南米からポーランドへと旅してみたいものだ。

閑話休題。「疲れた太陽」は「なつメロ」の復活だが、それだけでなく、タンゴと銘打った曲は、現代ロシアのポピュラー音楽の中では——ポップス、ロック、そして吟遊詩人

の歌うフォーク調の音楽にいたるまで、ジャンルを問わず——いまだに根強く書き続けられ、歌い続けられている。わが耽娯亭の誇る現代ロシア・ポピュラー音楽コレクションをちょっとだけ覗いてみよう。まず前衛ロック・バンド「クレマトリー」（火葬場）に『雲の上のタンゴ』というCDアルバムがあり（ただし、この表題曲を聞いても、どこがタンゴなのかよくわからない）、1968年から83年まで15年近くの歳月を収容所（グラーク）で過ごした吟遊詩人ゲンナジー・モルチャーノフには『収容所タンゴ』というCDアルバムがあり（ここに収められているのは、「収容所タンゴ」の他に、「監獄ワルツ」「処刑」「刑務所のメロディ」といった曲で、「さすがソ連文明の産物！」と唸らざるをえない）、国際的に活躍する（かつて日本の紅白歌合戦にも出演したことのある）ラトヴィア人女性歌手ライマにも、官能的な『タンゴ』というCDアルバムがある、といった具合だ。そのすべてをここで紹介するわけには、とてもいかない。また別の機会にしよう。

しかし、それにしても、ロシア・タンゴの生演奏がいつでも聞けるような洒落たレストランの一軒くらい、東京にあってもよさそうなものだ。お金と暇さえできれば、自分でそのうち開店してしまおうか、などとも考えているのだが……。もちろんそのときは野谷先生には毎晩入り浸っていただくこととして。

付記 この拙文のうち、今世紀初頭のロシアにおける「タンゴ狂」に関する部分は、一次資料の驚異的な博搜に基づく、以下の論文に全面的に負っている（つまり受け売りである）ことをお断りさせていただく。

Yuri Tsivian, "The Tango in Russia", *Experiment*, 2 (1996), pp.307-335.